【３トレ】

第３次調査にて斜面の裾部分で確認した崩された石垣と一連になる栗石の堆積を検出しました（写真７）。また、斜面の中間付近でも栗石の集積を確認しました。石垣に伴うもとの考えられますが、築石の出土量が少なく、高石垣の確証を得ることはできません。この点は、今後の課題です。

【出土遺物】

今回の調査では多くの瓦が出土しましたが、特筆すべきものとして揚羽蝶文様の鬼瓦があります。揚羽蝶の鬼瓦は今回の調査だけでなく、第３次調査でも出土していました（図２）。

出土した揚羽蝶の鬼瓦は、右向きの蝶を横から見たもの（Ａタイプ　写真８）、左向きの蝶を横から見たもの（Ｂタイプ　写真９）、左向きの蝶をやや斜め上から見たもの（Ｃタイプ　写真 10）の３タイプあります。いずれも丁寧な作りですが、類例が非常に少なく、珍しい瓦です。

【今回の調査でわかったこと】

１．推定天守台Ａに隣接する窪みが城の遺構と判明
上下２段の低い石垣で構成された空間と推測

推定天守台Ａに隣接する窪みでは破城によって崩されて埋められた石垣を確認しました。そして、第３次調査で確認した石垣と組み合って２段構成の石垣であったこともわかりました。この窪みの性格はこれまで不明でしたが、城に伴う遺構だったと判明したことは大きな成果と言えます。

２．最古級の揚羽蝶文鬼瓦が出土

３種類の揚羽蝶文鬼瓦が出土しました。同時代の類例があまりなく、非常に珍しいものです。城主の家紋と考えたいところですが、３人の城主との関係性が希薄であり、なぜ、揚羽蝶を鬼瓦の文様に採用したのかは不明な点も多いです。

廃城後に城が一時期、池田長吉の預かりとなることから、池田家の家紋との関係も考慮する必要があるかもしれませんが、今後の課題です。

写真７　３トレ全景（南西から撮影）

写真８　揚羽蝶文鬼瓦（Ａタイプ）

写真９　揚羽蝶文鬼瓦（Ｂタイプ）

写真 10　揚羽蝶文鬼瓦（Ｃタイプ）

編集　甲賀市教育委員会　平成 27 年 (2015 年) 9月6日発行
問い合わせ先　甲賀市教育委員会事務局　歴史文化財課
〒520-3393　滋賀県甲賀市甲南町野田 810 番地
電話：0748（86）8026　FAX：0748(86)8216

水口岡山城跡第４次発掘調査

写真１　１トレ瓦堆積状況　奥に見える石垣は推定天守台Ａの石垣（北西から撮影）

【水口岡山城の歴史】

天正 13 年（1585）４月、羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）は紀州攻めに動員した甲賀衆（中世以来、甲賀郡に在住した土豪たち）を改易（武士の身分をはく奪する）処分としました。その直後、秀吉は中村一氏を泉州岸和田から水口へ移し、大岡山（現在の古城山）に城を築かせました。それが、水口岡山城です。

一氏は、水口岡山城の城主となると同時に八幡山城（近江八幡市）を築城した秀吉の甥秀次の家老に任命されました。一氏のほか、田中吉政（八幡山城）、堀尾吉晴（佐和山城）、山内一豊（長浜城）、一柳直末（大垣城）が秀次付きの家老となっています。水口岡山城が築城された天正 13 年段階では秀吉に敵対する東海の徳川家康や関東の北条氏を睨み、近江国は東国制覇の重要な拠点と位置づけられていました。東海道を眼下に見据え、鈴鹿峠を望む立地にある水口岡山城は、まさに東国への足掛かりとして戦略的に重要な城のひとつだったのです。

天正 18 年、北条氏を倒し、天下をほぼ手中におさめた秀吉は、一氏を駿河国駿府城へ移し、増田長盛を水口岡山城の城主とします。さらに、文禄４年（1595）には長束正家を城主とします。二人とも豊臣家の五奉行のひとりでした。

しかし、慶長５年 (1600)、関ヶ原の戦いの後に廃城となり、家康は水口を直轄地とします。豊臣政権の象徴であった山城は破城となります。天和２年 (1682) に水口藩の成立以降は御用林となり、一般の人々の入山は禁じられました。

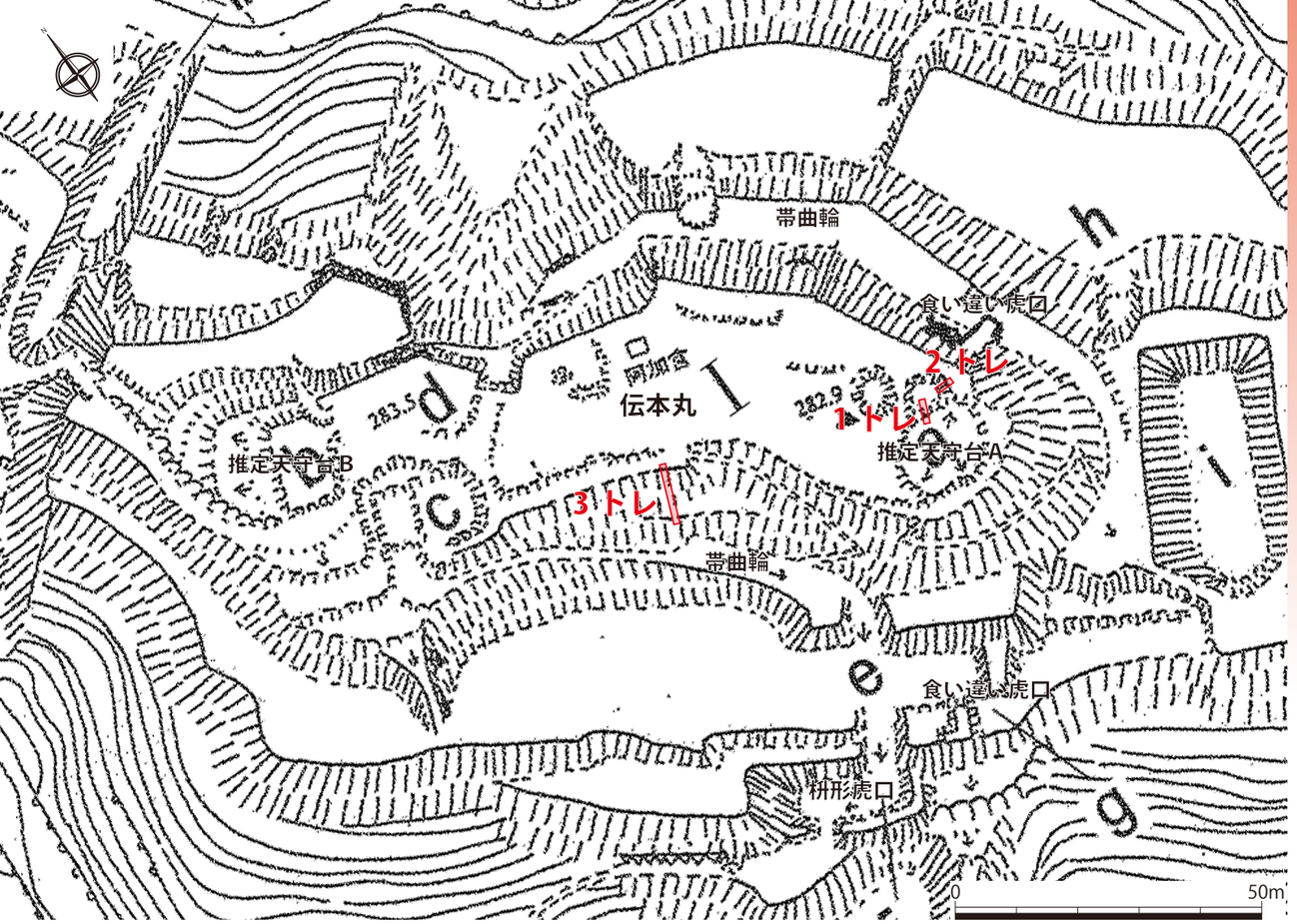

図１　水口岡山城跡第４次調査　調査対象地位置図　１：1,000　縄張り図は髙田徹氏作成（『甲賀市史』第７巻よりを引用）

【調査の位置と目的】

今回の調査は、伝本丸の東端に位置する推定天守台Ａに隣接する窪みの性格を解明することを第一の目的として調査区を設定しました（１・２トレ）。

また、伝本丸南側斜面についても石垣の構造を確認するために調査を行いました（３トレ）。

【１トレ】

表土直下で大量の瓦が堆積している状況を確認しました（写真１）。これらの瓦は、破城に伴って一括で廃棄されたものとみられます。瓦堆積の中には軒丸瓦や軒平瓦のほか、鬼瓦なども含まれていました。揚羽蝶をモチーフにした非常に珍しい鬼瓦が複数出土したことが特筆すべきことです。

また、瓦堆積を一部掘り下げたところ、下層で石垣の一部を検出し（写真２）、石垣に伴う裏込も確認できました（写真３）。

写真２　瓦堆積の下層で確認した石垣の一部（１トレ）

写真３　確認した石垣の裏込（１トレ）

写真４　２トレ石堆積検出状況（西から撮影）

写真５　石垣確認状況（２トレ）

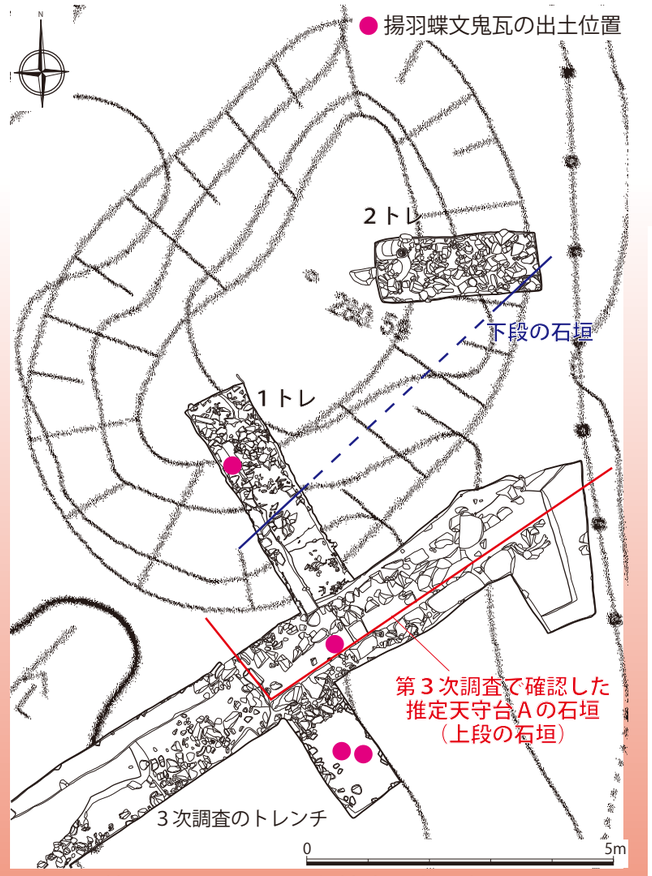

図２　第１・２トレンチと検出した石垣　１：100

【２トレ】

表土直下で大量の石が堆積している状況を確認しました（写真４）。堆積している石の大きさは 10 ～ 20 ㎝程度のものが多く、30 ㎝前後のものもみられます。調査開始当初はこの石の性格がよくわかりませんでしたが、石の堆積層を掘削すると、石垣の一部が現れました（図３・写真５）。したがって、この石の堆積は破城によって崩された石垣だったと判明しました。

確認した石垣は２段分で、築石の大きさはは 50 ～ 60 ㎝程度です。この石垣面を延長すると、１トレで確認した石垣と揃うため、両者は一連の石垣だったと考えられます。また、この石垣は角度がやや振るものの、第３次調査で検出した推定天守台Ａの石垣と平行しています（図２）。二つの石垣が２段の構造になっていたものと推定できます（図４）。

写真６　埋没した石垣（２トレ）

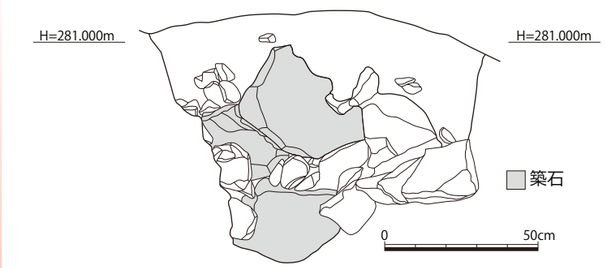

図３　石垣立面図　１：20（２トレ）

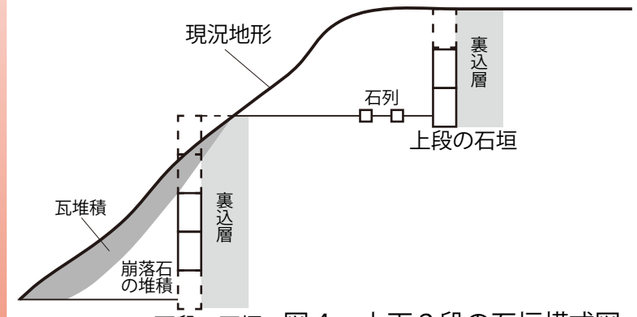

図４　上下２段の石垣模式図